

研究結果報告書

研究結果

研究目的：現代的形式の地域祭りでありながら祭儀性を保たれた歴史文化的背景はどこに由来するのか、「なら燈花会」の高い完成度はどのような努力から可能となったのか、独創的コンテンツを確保しつつ持続的に改善していける運営のメカニズムは何か、について興味を持ち、本研究をとおしてこれらを解明しようと試みた。

現況分析：「なら燈花会」は1999年、奈良地域の青年3団体(奈良商工会議所青年部・奈良県経営者協会青年経営者部会・社団法人奈良青年会議所)の協議により発足したNPO法人「なら燈花会の会」により企画された。夏の新しい観光資源を創出するためそれまで10年間行われていた「ならまつり」に変わる地域祭りを行おうと協議した結果であった。

研究方法：先行研究のない研究の対象を扱う方法である grounded theory (Strauss & Corbin, 1998) で分析した。

資料収集：文献資料収集は奈良の歴史に関する書籍、日本観光の歴史に関する論文、奈良観光に関する論文、奈良の文化に関する雑誌(月刊大和路『ならら』、季刊『あかい奈良』など)、近畿経済産業局や南都経済センターなど機関の報告書、奈良県庁及び奈良市庁発行の統計、「なら燈花会」発行の資料(ホームページ、ブロシユアー、写真集、NPO法人定款など)を対象とした。現場調査は「なら燈花会の会」会議参観、「なら燈花会」のサポーターとして灯りを設置するなどの活動をした。なお東大寺「万燈籠」、春日大社「中元万燈籠」、東大寺「修二会」、春日大社「春日祭」、「平城遷都1300年祭」期間中、平城京にて特別に行われた「なら燈花会」を観察した。深層面接は宿泊業、自営業、主婦、研究職、公務員、宗教者を含む14名に対して行った。1回1-3時間、必要に応じては追加的に行った。

分析結果：Open codingと axial codingの結果を解釈すると次の通りである。奈良の歴史や文化遺産はそこに生きる人々に誇りを持たせ主体性を育んだ。それに加えて奈良市民は guestの視線によって早くから hostとしての自覚を持つようになった。そのことは地域祭りを作り上げるに当たって伝統を継承し時代精神を反映した killer contentsを生み出すことへと繋がった。一方、観覧客たちは祭りを「楽しむ」というよりは、「祈り、敬畏し、感謝する」のである。こうした結果を踏まえ、さらに selective codingを行い、それぞれの categoryとの関係を分析すると『まほろば』が core categoryであることが判ってきた。奈良では「まごころを込めたもてなし」という意味で『まほろば』という表現を使い奈良独特の hospitalityを表す場合があって、用例を見ると hospitality産業というサービス精神とは違うニュアンスを持っている言葉であると理解できる。本研究では grounded theoryによって『まほろば』の属性を「きれい・ありがとう・誇り」と捉えた。「きれい」は観覧客の間から歓声のように思わず口からこぼれた言葉である。なお、彼らの中には「ありがとう、ありがとう」と言っている人が多くいた。注意深く聴いてみると、それはより崇高な対象への敬畏の念であった。「きれい、ありがとう、誇り」は、魂の精化、自然と環境への感謝、奈良の住民たる主体性に一致するのである。

結論：第一に、古代は修験道の紀伊山地、中世は仏教の東大寺、近世は春日信仰の春日大社というように奈良は常に信仰の中心地であり、その精神性が現代的形式に表出している。第二に、「なら燈花会」の高い完成度は『まほろば』という「まごころを込めたもてなし」の姿勢に由来し、人々の心の奥底より共感できる精神性の高い祭りのコンテンツに繋がった。第三に、多くの観覧客の参加を誘導するプログラムは、ただ灯りだけを「観る」行為から直接点火する参加の喜び、楽しさを「体験させる」ものである。こうした知恵は、奈良地域の由緒正しい伝統行事を今日まで支えてきた奈良市民に体化したものと見られ、こうした三つの要因により場所性が地域社会と融合し真正性 (authenticity) として場所資産となったと見なすことができるのである。

研究成果の公表について(予定も含む)

口頭発表 (題名・発表者名・会議名・日時・場所等)

題名: 地域祭り「なら燈花会」の現代的形式と市民社会の役割

発表者名: 許 文卿

会議名: 第27回 日本観光研究学会 全国大会

日時: 2012.12.2.

場所: 宮城大学

論文 (題名・発表者名・論文掲載誌・掲載時期等)

※下記は口頭発表時のproceeding・学術誌掲載論文は2013年予定

題名: 地域祭り「なら燈花会」の現代的形式と市民社会の役割

発表者名: 許 文卿

論文掲載誌: 第27回 日本観光研究学会 全国大会 学術論文集

掲載時期: 2012.12.

書籍 (題名・著者名・出版社・発行時期等)